

アロエ

Aloe

ツルボラン科 / Asphodelaceae

肉厚のロゼットと多彩な花色。薬用から希少コレクション種まで、約592種を擁するアロエ属の魅力を種から育てましょう。

基本データ

🕒 成長期

夏型（主要流通種。ただし種差が大きい）

🌡️ 耐寒温度

種差が非常に大きい（キダチアロエ -3~0°C / アロエベラ 5°C以下で危険 / ポリフィラ -13°C報告例）

☀️ 日照

日なた~明るい半日陰（種・季節により調整）

📅 播種適期

3~5月（春）

🕒 発芽日数

7~21日

📍 主原産地

アフリカ南部~マダガスカル・アラビア半島

🕒 概要・魅力

アロエ（*Aloe* L.）は、アフリカ南部を起源とし、マダガスカル・アラビア半島・インド洋の島々など広域に自生する多肉植物です。分類上はツルボラン科（Asphodelaceae）に属し、Kew POWOの受理種数は**592種**（広く「650種以上」とされることもあります）。草本から高さ10m超の樹木状まで、生活形の多様さも属の面白さのひとつです。

進化の歴史は古く、Grace et al.（2015, *BMC Evolutionary Biology*）の分子時計解析では、アロエ属は約**1,600万年前**に南アフリカで分化を開始し、2度の大きな放散を経て現在の多様性に至ったとされています。*Aloe vera*（アロエベラ）の起源地はアラビア半島であり、従来の「南アフリカ起源」説は否定されています。

日本で最もなじみ深いのは、縁側に飾られてきた**キダチアロエ（*A. arborescens*）**と、食品・化粧品原料として世界的に有名な**アロエベラ（*A. vera*）**。近年は完璧な螺旋ロゼットが美しい**ポリフィラ（*A. polyphylla*）**や、コンパクトでカラフルな小型ハイブリッドも人気を集め、実生（種から育てる）コレクションとしての需要が高まっています。

なお、樹木状で知られる「ディコトマ」は、2013年の分類改訂によりAloe属から***Aloidendron dichotomum***（現行正式学名）として独立した別属へ移されています。流通名「ディコトマ」はそのまま使われていますが、ラベルや文献では学名に注意が必要です。

アロエ属の主な魅力をまとめると次のとおりです。

- **造形美**：肉厚の葉が重なるロゼット、葉縁の鋸歯、季節に映える赤・橙・黄・白の管状花
- **実用性と観賞性の両立**：薬用・食用から希少コレクション種まで幅広いラインナップ
- **丈夫で育てやすい主流種**：キダチアロエ・不夜城など入門向き種は管理がシンプル

- **実生の楽しみ**：種から育てると株ごとの個性が生まれ、愛着が深まる

☀️ 置き場所

アロエの大多数の流通種（キダチアロエ・アロエベラ・不夜城など）は、**日当たりと風通しのよい場所**を好みます。ただし、**ポリフィラのような高山種は夏の高温多湿を非常に嫌う**ため、種によって置き場所の要件が異なる点をまず押さえておきましょう。

春~秋（生育期）

屋外の日当たりよい場所が理想です。真夏（30°C超）の強直射では、小型種・実生苗・高山性種を中心に**葉焼け**が起きやすいため、20~30%程度の遮光を検討してください。室内から屋外へ移す際は、1~2週間かけて徐々に光に慣らす**光順化**を行うと葉焼けを防げます。

冬（休眠期）

最低気温が10°Cを下回る前に、**室内の明るい場所（南~東向き窓際）**へ取り込んでください。耐寒性は種によって大きく異なります。

- **キダチアロエ**：乾燥状態なら-3~0°C前後まで耐えとされ、関東以西の温暖地では霜よけのある軒下での越冬報告もあります
- **アロエベラ**：5°C以下で葉細胞が壊死するリスクがあり、冬は室内管理が必須です
- **ポリフィラ**：高山性のため低温耐性は強い（-13°Cの生存例報告あり）ですが、夏の暑さと多湿が大敵です

共通の注意点：低温時に土が湿っていると腐敗リスクが急増します。冬越しは「乾燥状態が前提」と考えてください。

室内管理の場合

通年室内で管理する場合は、南～東向きの窓際でできるだけ直射日光が当たる場所を選びます。日照が不足すると徒長（間延び）の原因になります。

🕒 水やり

アロエは乾燥に強い多肉植物です。水のやりすぎによる根腐れが失敗の最大の原因であることを念頭に置き、「乾いたらたっぷり」の原則を徹底しましょう。

生育期（春～秋：4～10月頃）

用土の表面が乾いたら、鉢底から水が流れ出るまでたっぷり与えます。目安は10日～2週間に1回程度ですが、季節・置き場所・鉢のサイズによって変わります。「用土が乾いているか」を触って確かめる習慣をつけると確実です。

真夏は土が乾きにくい高湿度環境もあります。乾き切っていない状態での追い水は根腐れにつながるので注意してください。

休眠期（冬：11～3月）

水やりを大幅に減らし、断水気味～月1～2回程度に控えます。水を絞ることで細胞内の溶液濃度が上がり、低温への耐性が高まります。断水は越冬を成功させる重要なポイントです。

ただし、アロエベラは完全断水すると葉が萎れる場合があります。葉の状態を見ながら、萎れる前に控えめな水やり（月1～2回程度）を行うと安心です。

「葉が赤くなった」ときは

低温・強光・乾燥などのストレス時にアントシアニン色素が増し、葉が赤～紫褐色になることがあります。これは自己防御反応で枯死ではありません。環境が改善されると緑色に戻ることが多いです。ただし、アロエベラが5℃以下の低温にさらされた後に葉がゼリー状に崩れてくる場合は、細胞の低温壊死によるもので回復しません。

🔧 用土・植替え

アロエに最も大切なのは水はけ（排水性）と通気性です。もともと水が乏しいやせた土地に適応した植物なので、保水性の高い用土では根腐れを招きます。

用土の配合例

以下は代表的な配合です。ご自身の環境（気候・鉢の素材・置き場所）に合わせて調整してください。

- **基本の配合例**：鹿沼土（小粒）2：赤玉土（小粒）2：ピートモス2：川砂2：くん炭2
- **オーソドックスな配合**：赤玉土（小粒）4：軽石3：腐葉土2：川砂1（日向土を2～3割混ぜると排水性がさらに向上）
- **市販品を活用する場合**：サボテン・多肉植物用培養土に、軽石または日向土を3～4割追加して排水性を高めます

肥料は少なめが基本です。生育期（5～9月）に緩効性化成肥料または液体肥料を規定量の半分程度与える程度で十分です。

鉢の選び方

素焼き鉢や駄温鉢など通気性のよい鉢が根の健康を保ちやすいです。プラスチック鉢を使う場合は、鉢底石を多めに入れて排水性を確保しましょう。鉢は根がひと回り入る大きさを基本とし、大きすぎる鉢は余分な水分が抜けにくくなるため避けま

植替えの時期と頻度

1～2年に1回、3～5月（春）の生育初期が最適です。生育期（4～9月）であればいつでも植替え可能ですが、真夏の最盛期と冬は避けてください。

植替え後は数日～1週間ほど水やりを控えると、傷んだ根からの腐敗を防ぐことができます。

🌱 発芽のさせ方

アロエは種からも育てやすく、実生（みしょう）は自分だけの株をつくる楽しい方法です。発芽適温での管理と湿度の維持がポイントです。次の手順で進めましょう。

播種の適期

3～5月（春）、気温が20～25℃以上に上がる時期がお勧めです。秋（9月頃）に播く方法もありますが、冬の管理が難しくなるため、初心者には春播きが安心です。

発芽までの手順

1. **種子の前処理（消毒・吸水）**：殺菌剤（ベンレートなど）を薄めた液に種子を数時間～半日ほど浸けて消毒します。カビや立ち枯れ（ダンピングオフ）の予防が目的です。活力剤（メネデルール100倍など）を加える方法も広く行われています。
2. **清潔な用土を用意する**：新しい細粒の種まき用土を使います。古土の使い回しはカビ・雑菌のリスクがあるため避けましょう。小粒赤玉土や専用の種まき用多肉培土が適しています。
3. **種子を用土の表面に並べる**：種が重ならないよう、用土の表面にバラまきます。
4. **覆土は薄く、または行わない**：アロエは深植えにすると発芽率が下がります。覆土しない、またはごくうすらとかける程度にとどめましょう。覆土を控える主な理由は「深植えによる発芽不良」と「蒸れ防止」のためです。学術研究（Adia et al. 2020；Maphumulo et al. 2022）では暗黒下でも良好な発芽が確認されており、「光が必須」だから覆土しないわけではありません。
5. **湿度・温度を保って管理する**：ラップや密閉容器で覆い、湿度をほぼ100%に保ちます。発芽適温は25～30℃（Adia et al. 2020 によりタンザニア産5種で確認）。腰水（トレーに水を張って底面から吸水させる方法）で用土を乾かさないようにしてください。
6. **発芽の目安と確認**：適温・適湿下で7～21日程度で発芽が始まります。早い種は7日前後、遅い種や気温が低めの

場合は3週間以上かかることもあります。

7. **発芽後の管理（最重要）**：発芽後もしばらくは腰水・密閉状態を維持して乾燥を防ぎます。苗が立ち上がってきたら蓋をずらして少しずつ通気を確保し、徐々に外気に慣らします。「発芽よりも発芽後の管理が難しい」といわれるほど、この時期の小苗は乾燥と過湿の両方に弱いので、こまめに状態を確認してください。

カビが出た場合は殺菌剤（ベンレートなど）を薄めて散布し、通気を少し増やします。早期対処が大切です。

栽培メモ

病害虫・トラブル

アロエは比較的病害虫に強い植物ですが、置き場所や水やりの失敗でいくつかのトラブルが起きやすいです。早期発見・早期対処が回復の鍵です。



アロエの種子を探す
QRを読み取る / seedstock.jp

よくある病害虫

- **カイガラムシ**：葉の付け根・蕾・花部に白い綿状で発生します。殻を持つ成虫は薬剤が届きにくいので、歯ブラシやピンセットで物理除去してから殺虫剤を散布します。幼虫期（5〜7月頃）に定期的に薬剤を散布するのが効果的です。
- **ネジラミ（サボテンネコナカイガラムシ）**：根に白い粒状の虫が集まる地下の害虫で、原因不明の生育不良が続く場合は疑ってください。株を抜いて根を水でよく洗い、殺虫剤に浸けてから新しい清潔な土に植え替えます。
- **ハダニ**：高温乾燥時に葉の表面に細かい白斑・カスリ状の傷として現れます。初期なら水で葉を洗い流す。大量発生時は殺虫剤をローテーション散布して抵抗性を防ぎます。
- **アブラムシ**：花茎や新芽に発生しやすい。早期に手で取り除くか殺虫剤で対処します。

よくあるトラブルと対処

- **根腐れ**：水のやりすぎ・排水不良・風通し不足が主因。株元がやわらかくぶよぶよになったら根腐れのサインです。腐った部分を健全な断面が現れるまで切り取り、切り口を乾燥させてから清潔な土に植え直してください。
- **徒長（間伸び）**：日照不足・水・肥料の過多が原因。徒長した部分は元に戻らないため、光環境を改善し、切り戻してから挿し木で仕立て直す方法も有効です。
- **葉焼け**：真夏の強直射、または室内から屋外へ急に出した場合に起きやすいです。1〜2週間かけて光に慣らす「光順化」で予防してください。すでに焼けた葉は回復しませんが、株が健全なら新葉が展開します。
- **葉が赤くなる**：低温・強光・乾燥によるアントシアニンの蓄積で起きる自己防御反応です。環境を改善すれば緑に戻ることが多いです。ただしアロエベラが5℃以下の低温にさらされた後に葉がゼリー状に崩れる場合は低温壊死で回復しません。
- **実生苗のカビ・立枯れ（ダンピングオフ）**：発芽後の高湿度・密植環境で糸状菌が繁殖しやすいです。用土の事前殺菌、殺菌剤の定期散布、発芽後の段階的な通気確保が対策の基本です。